

都道府県・指定都市番号	9	都道府県・指定都市名	栃木県	研究課題番号・校種名	2 小学校
				教科名	社会科
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 小学校社会科において、よりよい社会の形成に参画する資質・能力の基礎を培うために、深い学びにつなげる教材の開発、学習内容の構造化、主体的・対話的で深い学びを通じた追究のプロセスや学習評価、学習活動の工夫について研究を行う。				
学校名 (児童数)	宇都宮市立横川東小学校 (863 人)				
所在地 (電話番号)	〒321-0923 栃木県宇都宮市下栗町 963 番地 (028-656-1031)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.ueis.ed.jp/school/yokokawa-e/				
研究のキーワード	・社会的事象の見方・考え方 ・教材の開発 ・問い ・学習活動 ・社会参画				
研究結果のポイント	○人間の思いや願い、工夫や努力が見える教材の開発 ○「社会的事象の見方・考え方」を働かせるための視点、資料・教材、獲得する知識との関連 ○教材の中の社会に見られる課題の明確化 ○学習内容の構造化 ○子供の主体的な問題解決学習を促す「問い」の設定 ○「振り返り」を生かした「問い」の設定 ○実社会に生きる人々との対話を取り入れた学習活動の工夫 ○互いの考えを広げ深める話し合い活動の工夫				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「自ら社会に関わり、他者と協働しながら豊かな未来を創造しようとする子供の育成」
 ～主体的・対話的で深い学びを通して、よりよい社会の形成に参画する力を育てる授業の構想～

(2) 研究主題設定の理由

①現代社会の情勢や新学習指導要領改訂の趣旨から

「知識基盤社会」や「情報化・グローバル化する社会」においては、必要な情報を自ら収集しながら、他者と協働して多角的に考察し、意思決定や行動選択を繰り返し行うことで、これからのよりよい社会づくりに積極的に関わっていく資質・能力を養っていくことが必要である。

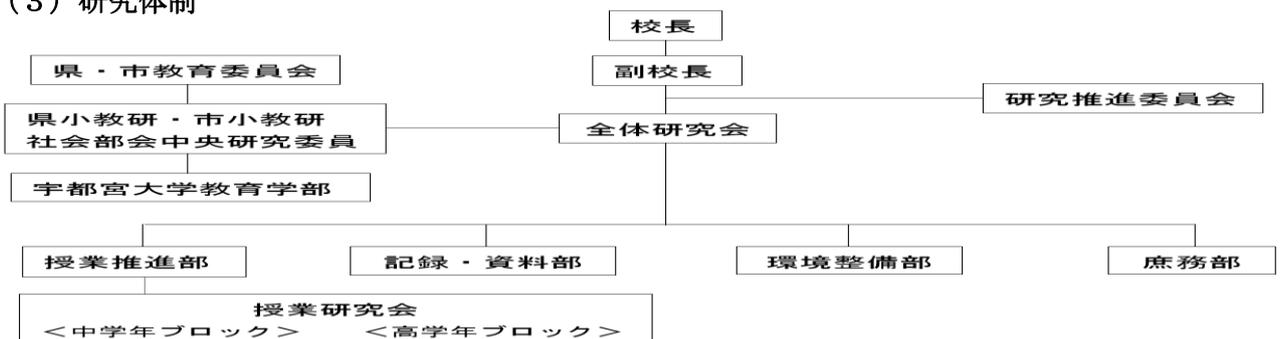
②児童の実態から

学習状況調査の結果から、学習することの必要性は感じているものの、地域社会との関わりの薄さや社会科の学習に対する関心の低さが見られる。また、自己の力を生かし、他者と協働しながら課題を解決していくことに課題がある。

③栃小社研の研究主題から

栃木県小学校社会科教育研究会(栃小社研)では、研究主題を「社会的事象の意味や特色を追究し、進んで社会に関わろうとする子供を育てる社会科学習」とし、研究を進めている。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成29年度	6月・校内授業研究会（市教委・要請訪問） 6年「今につながる室町文化」 7月・教育課程研究指定校研究授業 4年「そのごみはどこへいくの」 講師 文部科学省初等中等教育局視学官 澤井 陽介先生 10月・先進校視察（全小社研奈良大会） 11月・校内授業研究会（市教委・要請訪問） 3年「ものを売るしごとではたらく人たち」 5年「これからの工業生産とわたしたち」
平成30年度	12月・校内研修 社会科に関する講話 宇都宮大学教育学部（教授・准教授） 10月・校内授業研究会（市教委・要請訪問） 3年「ものを作るしごとではたらく人たち」 5年「情報を活用する産業」 10月・先進校視察（全小社研埼玉大会） 11月・教育課程研究指定校研究授業 4年「栃木県のじまん」 指導助言 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 小倉 勝登先生 11月・校内授業研究会（市教委・要請訪問） 6年「新しい日本，平和な日本へ」 12月・校内研修 社会科に関する講話 宇都宮大学教育学部（教授・准教授） 1月・社会科授業研究会（関ブロプレ大会） 3年「ものを売るしごとではたらく人たち」 4年「そのごみはどこへいくの」 5年「自動車を作る工業」

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら深い学びにつなげる教材の開発

社会的事象の意味や特色に迫るために、人間の思いや願い、工夫や努力が見える教材の開発を行う。また、子供自身が「社会的事象の見方・考え方」を働かせることができるよう、どのような資料・教材を準備し、どのような知識を獲得させるのかを明記する。さらに、社会に見られる課題が含まれた内容を教材化し、子供が他者と協働しながら追究し、自ら選択・判断をしていくことで社会参画への基礎を養っていく。

②学習内容の構造化

学習内容と教材の関係を一体として捉え、学習内容構造図を作成する。図には「発問と調べて分かる事実」、「考えて分かること」、「総合的に捉えさせたいこと」、「選択・判断」を示し、総合的に捉えさせたいことは子供の言葉で表し、実践レベルで活用しやすいものとする。

③主体的な学びにつなげる「問い」の構成

子供の主体的な問題解決学習を促すために、単元全体を見通す学習問題や授業レベルでの「問い」、学習したことを基に主体的に選択・判断できるような「問い」の設定の工夫をする。「問い」と「答え（まとめ）」をセットで考えるとともに、「社会的な見方・考え方」を働かせるための「問い」についても工夫する。「見通す・振り返る」活動を重視し、「振り返り」を生かして「問い」を設定することで、次への学習への意欲や問い続ける姿勢につなげていく。

④対話的な学びにつなげる学習活動の工夫

対話的な学びにつなげるため、実社会に生きる人々との対話を取り入れたり、人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたりする学習活動を取り入れる。また、互いの考えを広げ深める話し合い活動を充実させるため、個人の学習を十分に行ってから話し合いに臨ませること、「考え言葉」の活用、ノートや板書、ワークシート等協働的な学びのツールの工夫、学習形態の工夫を行う。

(2) 具体的な研究活動

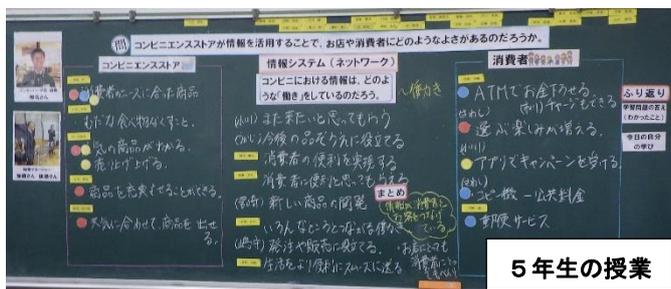
①「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら深い学びにつなげる教材の開発

3年生では、シリアル工場における仕事の工夫や努力について教材化を図った。工場を見学したり、工場で働く人たちにインタビューしたりすることで、人々の思いや願いに迫った。人々の相互関係に着目させることで、工場の様々な工夫や努力が消費者のニーズを実現するためのものであることを、話し合いを通して理解することができた。

4年生では、位置や空間に着目して栃木県の特徴を捉えるため



に、地形や土地利用、産業分布、交通の観点について調べた。具体的な理解に迫るために、教職員の出身市町について、インタビューを行った。また、土地利用と交通などがどのように関連して発展しているかを把握するために、土地利用図と交通網を重ね合わせて比較したり関連させたりする活動を取り入れた。



5年生では、情報を活用した産業学習において、コンビニエンスストアを事例に取り上げた。情報活用の実際を理解するために、総務マネージャーによる出前授業や店長へのインタビューを行った。また、情報を活用することでコンビニエンスストアや消費者にどのようなよさがあり、なぜ情報を活用するのかを考えることで、情報活用の意義に迫った。

6年生では、祖父母や高齢者の体験談を基に戦後の日本の復興を捉えていった。また、1964年に行われた東京オリンピックを扱い、日本が経済成長を果たした契機になったことを理解させた。「いかす」段階で、日本の課題を把握し、2020年の東京オリンピックに向けて自分は課題解決のためにどうしたいかを考え、多角的に未来を考える活動を行った。

②学習内容の構造化

子供の主体的な問題解決学習を促すために、学習問題や毎時間の問い、調べて分かる事実や考えて分かること、総合的に捉えさせたいことを明記して、児童のまとめの例を示した。また、選択・判断を行う単元については、選択・判断をさせるための「問い」と児童のまとめの例を提示した。目指すゴールや追究のプロセスを意識しながら単元展開をすることができた。

③主体的な学びにつなげる「問い」の構成

3年生では、生産に携わる人々の働きについて理解するために、「工場では、おいしくて安全なシリアルをたくさん作るために、どのような工夫をしているのだろう」と学習問題を作り、追究していった。まとめでは「何のために工場は、おいしくて安全なシリアルをたくさん作るのだろう」と問い掛けることで、消費者のニーズと工場の工夫には関連があり、自分たちの生活と深い関わりがあることを理解させることができた。



4年生では、栃木県の特徴をつかませるために、「わたしたちの住む栃木県には、どのような特色があるのだろう」と学習問題を設定して追究した。「産業分布と交通網の広がりにはどのような関係があるのだろうか」などと問うことで、相互の関連を捉えさせることにつながった。

5年生では、売り場で情報端末を活用している写真や売上の推移のグラフ等から、「コンビニエンスストアでは、どのような情報をどのように活用しているのだろう」と学習問題を設定した。「まとめる」段階では、「コンビニエンスストアで情報を活用することで、お店や消費者にどのようなよさがあるのだろう」、「コンビニエンスストアにおける情報は、どのような働きをしているのだろう」と問うことで、情報活用の意味を捉えさせることができた。

6年生では、新宿や宇都宮市の発展の推移が分かる写真から読み取ったことをもとに、「戦争が終わってから、日本はどのような努力をして復興をしていったのだろうか」という学習問題を設定した。戦後の改革、国際社会への復帰、高度経済成長、現代の日本に見られる課題を調べるを通し、日本は戦後、民主的な国家として出発し、国民の努力により国民生活が豊かになり、国際社会においても重要な役割を果たしていることを捉えさせようとした。



④対話的な学びにつながる学習活動の工夫

実社会に生きる人々の姿を調べるために、3年生では、シリアル工場で働く方に製品の作られ方や、製品への思いや願いについて話を聞いたり質問したりする活動を行った。また、5年生では、総務マネージャーによる出前を行うことで、コンビニエンスストアにおける情報の活用の仕方、情報活用への思いや願いについて、対話を通して理解することができた。

どの学年も、互いの考えを広げ深める話し合い活動の工夫を行った。話し合いの目的を明確にし、個人の学習を充実させて話し合いを行った。小ホワイトボードを活用して協働的に作業を行う、ペアやグループで話し合ったことを全体で話し合う、根拠



を基に考えを述べる等を継続的に指導することで、深まりのある話し合いを目指した。

協働的な学びのツールとして、板書の構造化を図るとともに、板書と連動したワークシートを活用することで、相互関係やつながり等を児童が把握しやすくなるようにした。また、ノート指導を充実させることで、自分の学びを振り返ることができるようになってきた。さらに、関係図や地図をトレーシングペーパーに写したものを活用することで、児童の主体的な追究活動を導き出した。



情報活用の関係図

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

- 工場やコンビニエンスストアで働く人など、人々の生きる姿が見える教材を開発したことで、自分の生活や生き方とつなげて考え、社会参画への素地を築くことができた。
- 「社会的事象の見方・考え方」を働かせるための視点や資料・教材、獲得する知識を関連させることで、社会的事象の意味や特色、相互の関連を考察することにつながった。
- 学習内容構造図を作成することで、教師が学習内容や追究のプロセスを把握しやすくなった。
- 児童の主体的な追究活動を促す明確な「問い」について研究が深まり、多角的な理解を通じた深い学びを促すことができた。
- 児童同士で意見のやり取りができるよう話し合いの仕方を指導したり、つなぎ言葉や考え言葉が定着したりすることで互いの考えを広げ深める話し合い活動の充実が図られた。
- 構造的な板書とワークシートとの連動、資料提示の工夫、ノートの工夫など、深い学びに至るためのツールの工夫を行うことができた。
- 社会への関わり方を選択・判断させるために、しっかりとした事実認識の後に社会参画について選択・判断するという構図を描いたり、社会に見られる課題を明確にしたりすることが必要である。
- 児童の主体的な学びを促すために、何を振り返らせるのか、「振り返り」を次の問いへとどのようにつなげていくのか、更に整理をしていく必要がある。
- 児童が概念的な知識を獲得するために、いかに自分の事として捉え具体的に迫るか、更に研究を深めていく。
- 児童主体の話し合いを実現するために、学び合いのスキルを向上させるだけでなく、「考えを広げ深める」といった話し合いの目的や「問い」をしっかりとした持たせることが大切である。

4 今後の取組

よりよい社会の形成に参画する資質・能力の基礎を培うために、「社会的事象の見方・考え方」を働かせるための教材開発や「問い」の設定、社会への関わり方を選択・判断するための場の設定、全ての教科に通じる主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業実践を積み重ねていく。